天理市豊田町　豊田トンド山古墳（仮称）発掘調査現地説明会資料

天理市教育委員会文化財課

現地説明会日時　**平成27年５月２日（土）13:00～15:30**　**（※雨天の場合は５月９日(土)に順延）**
所在地　天理市豊田町
調査期間　平成26年12月～平成27年７月
調査担当　天理市教育委員会文化財課　主査 石田大輔・主事 村下博美

１．はじめに

天理市教育委員会は天理市建設部が主管する都市計画道路（別所丹波市線）事業に伴う発掘調査を実施しています。**このたび発掘調査により７世紀前半に築造されたと考えられる未知の巨石積み大型横穴式石室が発見されました。**

２．調査地付近の概要

調査地は天理市豊田町集落北側の丘陵地にあたり、布留川の形成した扇状地・段丘を見下ろす高台にあります。**布留遺跡**は旧石器時代から現代に至るまで連綿と続く大規模な複合遺跡で、古墳時代中期～後期に最も繁栄を遂げます。首長居館や工房が見つかっており、**有力豪族物部氏の拠点であった可能性**が考えられています。また、布留遺跡周辺には**塚穴山古墳**や**峯塚古墳**など終末期古墳を擁する**杣之内古墳群や**が広がっています。

この布留遺跡の北方の丘陵上には古墳時代後期の大規模な群集墳として知られる**石上・豊田古墳群**があり、２基の大型前方後円墳（**石上大塚古墳・ウワナリ塚古墳**）のほか200基ほど円墳が群集しています。このほか、岩屋谷にも前方後円墳（**岩屋大塚古墳**）と方墳（**ハミ塚古墳**）が築かれています。今回の調査地はこの石上・豊田古墳群の南西端付近にあたります。なお、調査地東方には中世の山城として知られる**豊田山城**が所在しています。

３．今回の調査の概要

（調査進行中のため見解に変更が生じる場合があります）

新発見の横穴式石室　今回の調査地（**08D-0306古墳**）は地形上の特徴から一応古墳として認識され県遺跡地図に掲載されていました。しかし、これまでに発掘調査歴は無く、出土品等にかかる伝承も皆無であるため、本当に古墳であるかどうかの確証は得られていない状況でした。**今回の調査により、08D-0306古墳に大型の横穴式石室が存在することが初めて明らかとなりました。**

古墳の名称　08D-0306古墳の所在する地域の地名については字「中ノ谷」「狐塚」がありますが、地元在住の方々から聞き取った結果、さらに狭い範囲を指す地名として「トンド山」という呼称があることがわかりました。このことから、地名を古墳名とする原則に基づいて**「豊田トンド山古墳（仮称）」**と命名することを検討しています。

古墳の位置・形状　丘陵の頂上部に古墳が築かれています。丘陵の南斜面を切り開くことにより墓域を形成したもので、他の終末期古墳とも共通する立地形態（「山寄せの古墳」）です。墳頂は現状で標高114.5mです。後世の山城の築城により地形が改変されていますが、**墳丘は直径30m程度の円墳となる可能性があります（現時点では未確定）。**

横穴式石室の特徴　見つかった横穴式石室は南南西の方向に開口しており、天井石と側壁の一部の石材は失われています。石室は床面で**全長約9.4m**、玄室は奥壁の幅約2.0m、高さ約2.6m、側壁の長さ約4.9m、羨道は玄門の幅約1.7m、側壁の長さ約4.5mあります。両側に袖部を有する両袖式の石室です。**最大で一辺の長さ約３mに及ぶ巨石を積み上げて壁面を構成**しています。床面には長径30cm程度の床石を敷き詰めています。なお、玄室奥壁下段の石材はベンガラにより赤彩されていたことが分析により判明しました。

埋葬状況　石室内は盗掘を受けているため当初の埋葬状況を確認することはできませんが、玄室内を中心に細かく破砕された二上山の凝灰岩が多数出土しており、**凝灰岩製の石棺が安置されていた**と考えられます。また、羨道床面に多量のベンガラにより赤く変色している部分があり、付近から鉄釘が多数出土していることから、**羨道部に木棺が安置されていた（追葬されていた）可能性**も考えられます。

盗掘・石材の取り出し　石室内の床面直上には石棺部材である凝灰岩の破片とともに少量の瓦器片も出土しており、**13～14世紀前後に床面にまで達する盗掘にあっている**ことがうかがえます。また、もともと石室を構成していたと考えられる石材が割られたもの（矢穴のある石材）も観察でき、**石室の天井石や側壁上部の石材が後世に他の用途に流用された**ことがわかります。

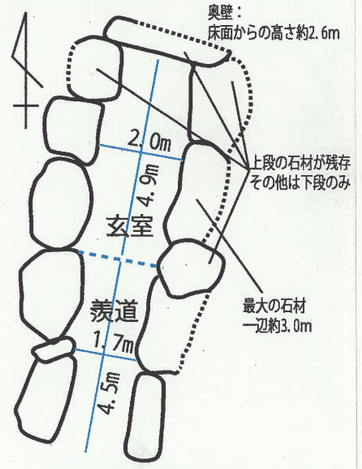
出土遺物・築造時期　石室内は盗掘を受けているものの、須恵器・土師器のほか鉄鏃・大刀の破片などの副葬品が出土しています。出土する須恵器等の特徴から古墳の築造時期は**７世紀前半**と推定されます。

４．おわりに

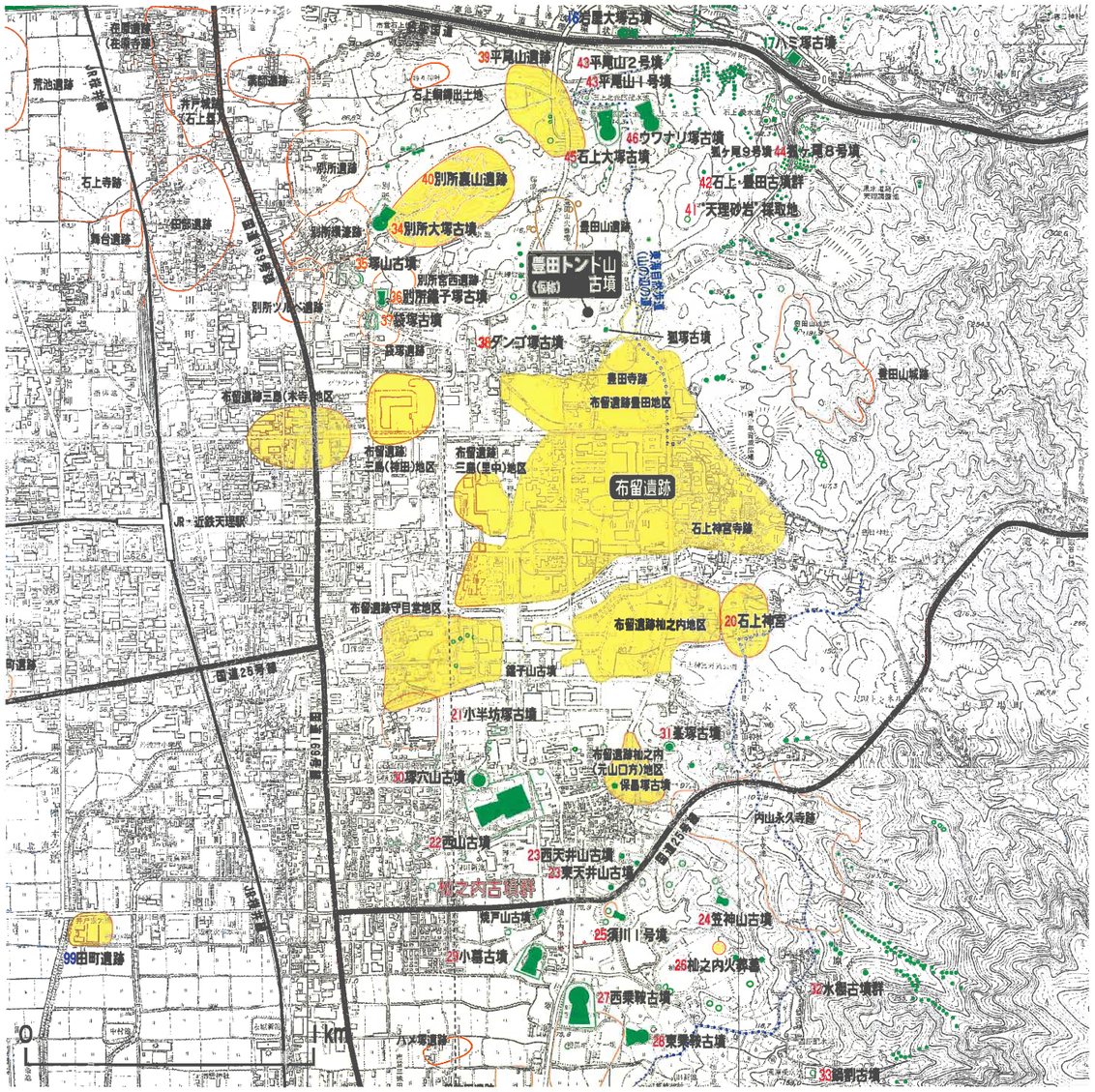
豊田トンド山古墳（仮称）は石上・豊田古墳群では前方後円墳（石上大塚古墳・ウワナリ塚古墳など）や方墳（ハミ塚古墳）に次ぐ墳丘規模を有しています。横穴式石室もこれらの前方後円墳や方墳に次ぐ大きさであり、他の円墳の墳丘や横穴式石室とは一線を画するものです。また、石上・豊田古墳群における小規模な円墳は尾根筋や斜面に密集して分布している一方、豊田トンド山古墳は単独で高所に立地しており、古墳群全体で見ても特徴的な立地といえます。さらに、石上・豊田古墳群のなかでは最終段階に造営された古墳であり、同時期の古墳のなかでは最有力の被葬者が想定されます。

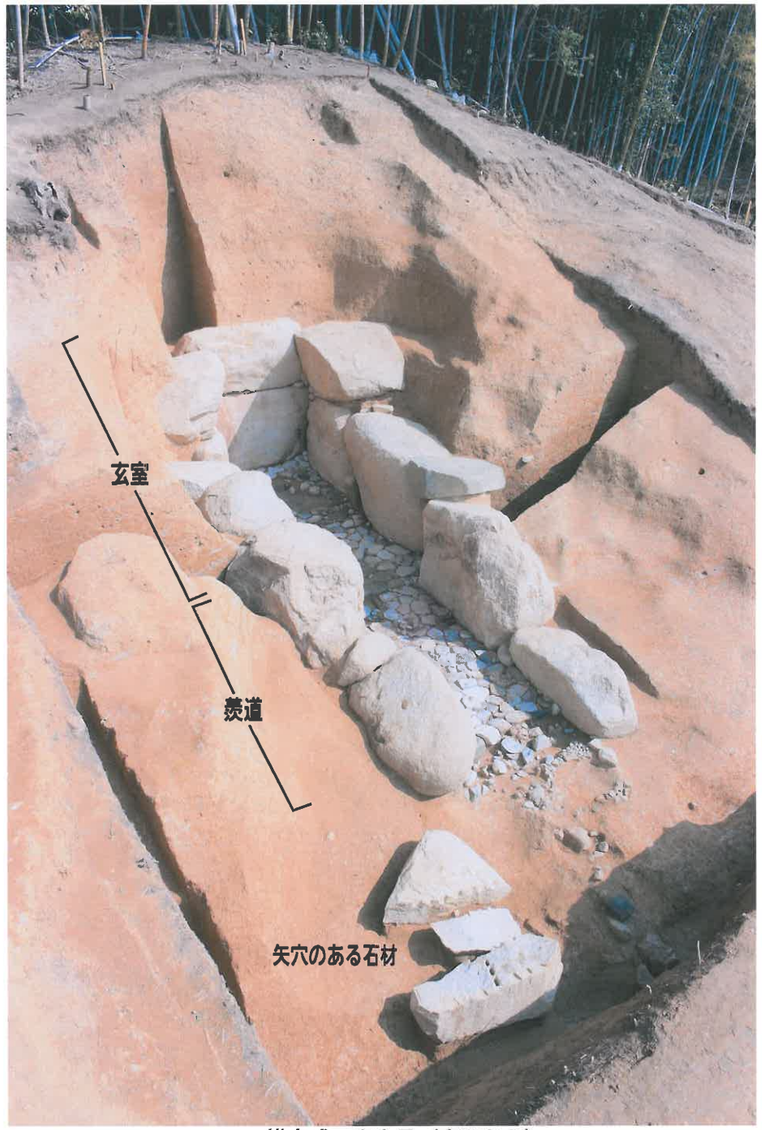
豊田トンド山古墳（仮称）は石上神宮や布留遺跡を見下ろす高所にあり、これらを強く意識した立地といえます。墳丘や横穴式石室の規模からみても、布留遺跡と密接に関わる有力な首長層の墓である可能性が高いと考えられます。

横穴式石室 各部の名称



［横穴式石室平面略図］





横穴式石室全景（南西から）

横穴式石室全景（北から）

玄室床面

鉄鏃群出土状況

玄門付近（羨道側から）

羨道床面（東から）

航空写真（南東から撮影）

横穴式石室全景（南から）

玄室（南から）

石室前面の山城遺構（東から）